九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

T.S. エリオットのPoems（1920）における“Gerontion”の評価

古賀, 元章
福岡教育大学 : 名誉教授

https://doi.org/10.15017/1909547

出版情報：Comparatio. 21, pp.30-47, 2017-12-28. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

T. S. エリオットの *Poems* (1920) における "Gerontion" の評価

古賀元章

はじめに

1919 年、T. S. エリオット (Thomas Stearns Eliot, 1888－1965) の第二詩集 *Poems* (1919) が刊行される。第二詩集の特徴は、人間の歴史的過去と現在との比較描写である。この比較描写は、人間の歴史的過去と現在の密接な結びつきが明らかにされる。それ以前に、第一詩集 *Prufurock and Observations* (1917) が刊行されていた。第一詩集は、"The Love Song of J. Alfred Prufrock" (1910－11) を冒頭の詩として、現在の人間社会の退廃的な姿を強調する。この姿に大きく影響を及ぼしているのが、冒頭の詩の主テーマ (実らぬ男女間の愛、上品ぶった社交界、倦怠な場末) である。第一詩集は、冒頭の詩の描写を起点として、この主テーマのいずれかを展開する構成となっている。[1]

1920 年、第三詩集 *Poems* (1920) が公表される。第三詩集には、"Gerontion" (1919) を冒頭の詩として、第二詩集 (計 7 編) から 7 編の詩が加えられ、第一詩集 (計 12 編) から 12 編が加えられる。それ以外に、第三詩集にはまた、新たに 5 編の詩 ("Gerontion"を含む) が含まれている (Gallup 24-27)。

第三詩集の前半は、第二詩集の特徴が反映して、人間の歴史的過去と現在との比較描写を深めている。同詩集の後半は、第一詩集からの詩によって構成され、上述したように、現在の退廃的な人間社会を伝えている。"Gerontion" の主テーマは、歴史的過去から現在まで反復される 2 点 (①罪深い人間、②人間社会の堕落) である。第三詩集の前半は①と②を提示している。同詩集の後半は、これら 2 点を背景に人間や人間社会の現在を表現している。その上、第三詩集は、前半と後半の相互関係によって、人間の歴史的過去と現在の退廃的な人間社会が深く理解できる構造となっている。

そこで本稿では、このような第三詩集の構成の中で、冒頭の "Gerontion" をどのように評価したらいいのかを検討する。なぜなら、詩集を視野に入れた検討はエリオットの詩の従来の研究では不十分だからである。

1. *Poems* (1919) の詩の特徴：過去と現在との比較描写[2]

第二詩集 *Poems* (1920) の冒頭は "Sweeney Among the Nightingales" (1918) である。この詩のエピグラフ (56)[3]は、Southam の英訳 (121) で引用すれば、"Alas, I am struck deep with a mortal blow."である。これは、ギリシャの悲劇詩人 Aeschylus (525－456 B.C.) の *Agamemunon* からの言及で、トロイア戦争を終えて古代ギリシャの都市国家アルゴスに帰還したアガメムノン (Agamemunon) 王が湯殿で不倫の妻クリュタイムネトラ (Clytemnestra) に致命傷を負わされたときに発する言葉である。

"Sweeney Among the Nightingales" にはこのギリシャ神話からうかがわれる人間の死のイメージがどのように用いられてかについて考察してみたい。この詩の書き出し（1－4行）に登場する人物の名前はエイプネック・スウィーニー（Apeneck Sweeney）である。ファーストネイムのエイプネックは猿の頸を意味する。類人猿のようなスウィーニーは、膝をひろげ、両腕をたらし、口を大きく開けて笑う。そのとき、頸にそった彼のシマウマ模様が腫れて斑点の模様となる。書き出しで、スウィーニーの動物性が視覚的に示される。

5－7行は、荒れ模様の空に浮かぶ月の暈が西の方角のプレート河（南米のウルグアイとアルゼンチンの間に存在）に向かう描写である。月の暈（かさ）は、気象学的には嵐が到来する前兆である（『荒地』207）。その前兆は不吉な出来事の前兆でもある。不吉な出来事の予感と "Sweeney Among the Nightingales" のエピグラフ（アガメムノンの死）に着目すると、この詩はスウィーニーの不幸な死を予期させる。その点を留意して、この詩の内容を検討する。

スウィーニーの描写の後、次のような場面が書かれている。

The person in the Spanish cape
Tries to sit on Sweeney's knees

Slips and pulls the table cloth
Overturns a coffee-cup,
Reorganised upon the floor
She yawns and draws a stoking up; (ll. 11-16)[4]

11行の人物は、スウィーニーがいる酒場の娼婦である。女は、彼の膝に座ろうとするが、足を滑らして誘惑に失敗する。この失敗の様子から判断して、彼女は傍観者やわれわれ読者を思わず笑わせるような卑俗な人間として描かれている。

続いて、次のような場面が示される。

The silent vertebrate in mocha brown
Contracts and concentrates, withdraws;
Rachel *née* Rabinovitch
Tears at the grapes with murderous paws;

She and the lady in the cape
Are suspect, thought to be in league;
Therefore the man with heavy eyes
Declines the gambit, shows fatigue, (ll. 17-24)

男は、"The silent vertebrate in moch brown" として表現され、下等動物のような容態である。この男が、スウィーニーと女の様子を目撃する。彼は窓の敷居に這いつくばり、大口をあけている。動作も容態と共に、彼が卑俗な人間であることを印象づける。2 人の様子を目撃する役割が終わり、彼はこの場所から退く。代わって現れるのがレイチェル（旧姓ラビノヴィッチ）という女である。彼女は、ウェイターが運んできた果物の中から葡萄の実を殺意のあるような爪先でもぎ取る。動物的な卑俗の彼女が、同じような印象のスペイン風のケープ姿をした女と共謀して、自分を殺害しようと話し合っているのではないか、とスウィーニーは予感する。しかし彼は、身の危険をどうしたらいいのか判断できずにいる。

スウィーニーは酒場を出るが、中にいる人物たちが気になって窓の外から覗き込む。酒場の主人が少し離れた戸口で、誰ともわからない男（刺客と思われる）と話している。その後、"The nightingales are singing near / The Convent of the Sacred Heart"（ll. 31-32） が描かれる。この描写は、酒場にいた女たち（娼婦、レイチェル）がナイチンゲールとなって、キリスト教会の尼僧修道院の近くで歌っていることを示唆する。この鳥は、ローマの詩人 Ovid （3 B.C.－? A.D. 17）が著した *Metamorphoses* の中で、フィロメラ(Philomel) がトラキアの国王テレウス（Tereus）から陵辱を受けた後、ナイチンゲールに変身したギリシャ神話（『転身物語』巻 6　208－19 を参照）を連想させる。そこで、エリオットの詩の女たちは一種のコーラスとなって、スウィーニーの死を皮肉にも弔っているように思われる。

この詩は次のような場面で終わる。

> And sang within the bloody wood
> When Agamemnon cried aloud
> And let their liquid siftings fall
> To stain the stiff dishonoured shroud. (ll. 33-36)

34 行は、この詩のエピグラフ（不倫の妻クリュタイムネトラによる夫アガメムノンの殺害の場面）に留意すると、スウィーニーが殺害されることを思い起こさせる。そこで 33 行は、スウィーニーの死に対するエリオットの詩の女たちの弔いの歌を暗示しているであろう。35－36 行は、彼の殺害がアガメムノンの殺害ほど深刻な話ではなく、卑近な日常の出来事であることを殊更に力説しているかのようである。その力説が逆に、スウィーニーの死を強く印象づける結果となっている。

現代（この詩が公表された当時）のスウィーニーと神話のアガメムノンの両方を併置して詩作するエリオットの姿勢を探ってみよう。1905 年、エリオットは 未発表の散文 "The Man Who Was King" を書いている。その散文の内容は、フランス人から日曜日に衣服を着て教会へ行くように教育を受けたため、文明化された土着民が退屈したということである（Jain 21)。これは、土着民の文明化がかえって、彼らの生活を退廃させたことを示唆する。1922 年、エリオットは "London Letter" の中で、不幸な群島の住人が、押し付けられた文明によ

って一切の興味を失い、死に瀕していることを指摘するイギリスの心理学者 W. H. R. Rivers の *Essays on the Depopulation of Melanesia* を紹介する（662－63）。この紹介は、文明社会の発達が逆に人間を不幸にするというエリオットの見解である。"Sweeney Among the Nightingales" の卑俗的な人物描写は、このような彼の見解に基づく文明社会の堕落論であるように思われる。この詩におけるスウィーニーの死は、退廃的な社会における人間の精神的な死を象徴すると言えよう。学生時代のエリオットは、所有するドイツの哲学者 G. W. F. Hegel（1770－1831）の *Lectures on the Philosophy of History* にある余白の頁に記入しているのは、われわれと過去との関係、現在以外についての論考（の可能性）を自問して、過去の現存を肯定することである（Jain 146）。アメリカ人の詩人 Ezra Pound（1885－1972）はイギリスで、こうしたエリオットの考えを詩作の面で推し進める役割を果たしている。その役割を裏づけるのが、パウンドの歴史的方法に関するエリオットの次のような文章である。

> As the present is no more than the present existence, the present significance, of the entire past, Mr. Pound proceeds acquiring the entire past; and when the entire past is acquired, the constituents fall into place and the present is revealed. ("The Method of Mr. Pound" 1065)

エリオットが目に留めるのは、過去が現存する現在の提示である。過去と現在の密接な結びつきを強調したパウンドの手法を、エリオットは "Sweeney Among the Nightingales" の中に取り入れている。それは、ギリシャ神話の殺害場面を利用して、過去と現在の共通点を描くことである。その共通点は、過去の醜い人間の行為が形を変えて現在に繰り返されていることである。過去と現在を比較した描写は、エリオットがこの詩を執筆する段階で、パウンドの歴史的方法を強く意識したことの表れである。

"The Hippopotamus"（1917）では、丸い胴体で短い四足の河馬は、血と肉だけで生きているような動物にすぎないので、神経の衝撃に耐えられない。この動物はまた、足元がおぼつかないので、獲物を求めるとき、よろめいてしまう。「真実の教会」（"the True Church" l. 7）は、足元（資金源）がしっかりしているので、配当が自ずと集まってくる。卑俗な河馬の容態と真実の伝授を標榜する聖なる教会の姿が比較されている。

この詩の描写は、上述した比較が土台となっている。そのような描写が見られる次のような別の場面を引用してみたい。

> The hippopotamus's day
> Is passed in sleep; at night he hunts;
> God works in a mysterious way－
> The Church can sleep and feed at once. (ll. 21-24)

21－22 行は、昼に水中で寝て、夜に陸で草を食べる河馬の夜行性を記している。教会は、元来、宗教の教義を信者に説いたり、信者が礼拝したりする厳粛な場所である。23 行から読み取れるのは、教会が、自ずと集まる配当に安住して、河馬のように努力しないですむということである。24 行では、河馬とは対照的に "The Church can sleep and feed at once." という皮肉を交えた表現は、教会の現状を暗に揶揄している。

この詩は次のような場面で終わっている。

He shall be washed as white as snow,
By all the martyr'd virgins kist,
While the True Church remains below. (ll. 34－36)

場面の前半は、本能のままに素直に生きた河馬が昇天したとき、天国で祝福されることを伝えている。場面の後半は、「真実の教会」が地上で、相変わらず自らの利益だけを求めていることを風刺している。

"Mr. Eliot's Sunday Morning Service" (1918) では、次のような詩行が描かれている。

The sable presbyters approach
The avenue of penitence;
The young are red and pustular
Clutching piaculative pence. (ll. 17-20)

黒衣の長老たちが改悛者たちに近づく。若者の改悛者たちは、長老たちから贖罪の保証を得るために小銭を用意している。彼らは、お金で罪の赦免を求めて教会に集まっている。

その教会に関する場面が次のように書かれている。

Under the penitential gates
Sustained by staring Seraphim
Where the souls of the devout
Burn invisible and dim. (ll. 21-24)

これら 4 行は教会の壁に示された「煉獄の門」("the penitential gates") の絵についての説明であると思われる (Southam 119)。この絵は、死者の魂が天国に入る前に煉獄で罪を浄められる光景である。一般に、凝視する熾天使 (天使の 9 階級の中で最高位) に支えられた悔い改めの門のもとで、生前に信仰の厚かった者たちの魂の浄罪が行われる。しかし、この絵の魂の姿が改悛者たちには目に見えずほんやりとしている。このような出来事は、形骸化した贖罪を行う教会を暗に批判しているように思われる。

スウィーニーがこの詩の最後の場面に登場し、次のように紹介される。

> Sweeney shifts from ham to harm
> Stirring the water in his bath.
> The masters of the subtle schools
> Are controversial, polymath. (ll. 29-32)

最初の2行では、入浴した彼が、お尻を移動してお風呂の湯をかきまわす。残りの2行では、神学者たちが、古来、神学上の様々な論争をしてきた博識家として示唆されている。このような4行の描き方は、スウィーニーが宗教に無関心な俗物であるが、神学者たちが知識をひけらかして不毛な論争をしたり、物欲の誘惑に明け暮れたりすることを暗示している。それは、堕落した人間社会と本来の人間救済を忘れた教会を共に批判しているのである。

"The Hippopotamus" と "Mr. Eliot's Sunday Morning Service" に見られた人物描写について考えてみたい。前者の詩の河馬も後者の詩のスウィーニーも、動物性を前面に出した性格なので、"Sweeney Among the Nightingales" のスウィーニーと同じく人間の内面の醜い様相の象徴として描かれている。そこにも、エリオットの人間社会の堕落論が反映されている。

"The Hippopotamus" と "Mr. Eliot's Sunday Morning Service" にうかがわれた教会の描写についてのエリオットのキリスト教観を検討してみよう。1916年の彼は、アメリカの観念的なユニテリアン派の哲学者 Hastings Rashdall の *Conscience and Christ* に対して次のような見解を示す。

> For Canon Rashdall the following of Christ is "*made easier*" by thinking him "as the being in whom that union of God and man after which all ethical religion aspires is most fully accomplished." Certain saints found the following of Christ very hard, but modern methods have facilitated everything. Yet I am not sure, after reading modern theology, that the pale Caliæan has conquered. ([A review of] *Conscience and Christ: Six Lectures on Christian Ethics*. By Hastings Rashdall" 112)

ラシュダールによれば、キリストのもとで神と人間の合一が最も成し遂げられると考えれば、何事も容易に行われるという。ラシュダールの考えは、信仰の基準だけが有効であるということになる (Childs 60)。しかしエリオットは、こうした実用的な神学に賛成しない。ラシュダールの神学は、エリオット家と同じ宗派ということもあって、エリオットの祖父の影響下で現実社会での人間の向上を重視する両親の信仰と類似している。エリオットがラシュダールの神学に否定的な考えをするのは、エリオット家の宗派への反発[5]と関係するし、イギリスの哲学者・批評家 T. E. Hume (1883－1917) の信念 (「原罪」説、厳しい情緒訓練) に

共鳴[6]とも関係すると言える。こうしたエリオットの姿勢が、"The Hippopotamus" と "Mr. Eliot's Sunday Morning Service" における教会の現状の批判へと向けられているのである。

2. *Poems* (1920) における "Gerontion" の特徴：ゲロンチョンの歴史的感覚[7]

第三詩集 *Poems 1920* の冒頭は "Gerontion" である。この詩では、表題がそのまま語り手の名前となっている。名前は、ギリシャ語で小柄な老人を意味するゲロンチョンである。"Here I am, an old man in a dry month, / Being read to by a boy, waiting for rain." (ll. 1-2) という書き出しは、小老人が先行き短い人生を感じていることを暗に示している。少年から読んでもらっている本の内容から、彼は次のようなことを思い浮かべる。

> I was neither at the hot gates
> Nor fought in the warm rain
> Nor knee deep in the salt marsh, heaving a cutlass,
> Bitten by flies, fought. (ll. 3-6)

"hot gates" は、紀元前 480 年にギリシャ軍がペルシャの大軍を全滅させたことで有名な場所テルモピレー (Thermopylae) の英訳である。"the salt marsh" は、エリオットが追想する「ガリポリ半島の沼」("mud of Gallipoli") ("A Commentary" [Apr. 1934] : 452) を思い起こさせる。この沼では、彼のパリ遊学時代 (1910－11 年) の友人で医学生の Jean Verdenal (1890－1915) が第一次世界大戦中の 1915 年、地中海につながるエーゲ海と黒海につながるマルマラ海を結ぶダーダネルス海峡 (Dardanelles) で戦死している。この事実から察して、5－6 行は「ガリポリ半島の沼」での戦争の光景を連想させる。3－6 行は古代ギリシャの戦争から第一次世界大戦までの間に起こった戦争を背景としている。ゲロンチョンの歴史的感覚は古代ギリシャから第一次世界大戦後の 1919 年にまで及んでいる。

戦争の場面の後、ゲロンチョンを取り巻く現在の状況が次のように書かれている。

> My house is a decayed house,
> And the Jew squats on the windows sill, the owner,
> Spawned in some estaminet of Antwerp,
> Blistered in Brussels, patched and peeled in London. (ll. 7-10)

彼は、ユダヤ人の家主の過去と現在における生活を説明している。家主には生きがいとなるものが見当たらない。"Spawned" は、家主が卑しい生まれで、若い頃に惨めな生活を送っていたことを示唆する。「カフェ」("café") に相当するフランス語 "estaminet" は、第一次世界大戦中にフランスやベルギーから帰国した兵たちによって英訳された語である (Southam 70)。この用途から察して、"Blistered"、"patched"、"peeled" は大戦で負傷した

兵士たちの姿に言及しているであろう。この言及から、アントワープ（ベルギーの都市）、ブリュッセル（同国の首都）、ロンドンは、彼らの帰国の居住地と関係があるように思われる。過去から現在まで続く家主の活気のない生活は、彼の借家に住むゲロンチョンの生活でもあることが読み取れるであろう。

家主とゲロンチョンは共に、惨めな人生を送っている。家主の描写が語り手の口から語られているように、その語り手は自分自身を、直接的に表現するばかりではなく、この詩に現れる人物を紹介することによって間接的にも表現している。このような自己表出は、ゲロンチョンの住む退廃的な社会の一面を表している。

語り手の思考を理解するため、エリオットが取り消したエピグラフに注意を払ってみよう。それは、中世イタリアの詩人 Dante Alighieri（1256－1321）が著した *Divine Comedy* の *Inferno* 33.121-22 の "Come il mi corpo stea / Nel mondo su, nulla scienza porto." "Gerousia [Gerontion]" 349)（「一体どうして俺の肉体が未だに / 現世にとどまっているのか学がないからわからない」（『神曲』119）である。この言葉を述べるのは、氷の中に閉じ込められている修道士アルベリーゴ（Alberigo）である。彼は、顔を仰向けにしているので、流す涙が凍り付いて何も見ることができない。ダンテはこの罪人に出会う前、風が吹いているのを感じていた。実は、この風を吹き起こしているのがこの罪人である。

エリオットがエピグラフとして望んだ *Inferno* 33.121-22 は、"Gerontion" の次のような場面に反映されている。

I an old man,
A dull head among windy spaces. (ll. 15-16)

アルベリーゴが無学であることと、ダンテが風にさらされることが、上の場面に取り入れられている。ゲロンチョンは、この罪人のいる地獄の状況に類似して、まるで心身が分離されているような人格の喪失者となっている。

ゲロンチョンが住む借家、現在の荒廃した場所、彼の生気のない心身は、現代文明の醜悪な一面（総じて、人間社会の退廃）を表していると考えられる。こうした考えと第一節の描写を参考にすると、彼の人生遍歴は、古代ギリシャから第一次世界大戦に至るまでの人間やその文明の退廃を象徴しているであろう。

しかし第一節は、人間における歴史的過去と現在の関係や、この詩の 16 行の意味を十分に解説しているわけではない。この点をもっと探究するため、第二節の描写に目を移してみる。同節の冒頭は次の通りである。

Signs are taken for wonders. 'We would see a sign!'
The word within a word, unable to speak a word.
Swaddled with darkness. In the juvescence of the year

Came Christ the tiger (ll. 17-20)

17 行の " 'We would see a sign!' " は、「マタイによる福音書」12 章 38 節の「先生、わたしたちはあなたから、しるしを見せていただきとうございます」("Teacher, we wish to see a sign from you." *The Bible* 846) から借用したものである。奇蹟を要求する律法学者パリサイ人に対して、キリストは「邪悪で不義な時代は、しるしを求める」(「マタイによる福音書」12 章 39 節) と答える。聖書からの適用は "Signs are taken for wonders." にも認められる。「徴(しるし)」("sign") は神の意志の証を意味する。「徴」を求めるパリサイ人のような人々は、この「徴」を神の奇蹟であると誤解してしまう。ここで三度用いられている "word" は、違った意味を表している。最初の "The word" は幼児のキリストを指している。二番目の "a word" は神の御言葉がこのキリストの姿に呼応して小文字となっている。三番目の "a word" は人間が話す言葉である。これら三つの意味から判読できるのは、18 行がイエス・キリストによる人間の救済を予示していることである。しかし、キリストが実際には猛虎として来たと、語り手は語る。この発言から察して、若き日のゲロンチョンは救済主の意に逆らった人生であったことが想像される。

自分の青春時代に触れて、ゲロンチョンは 4 人の堕落した人々を次のように話す。

In depraved May, dogwood and chestnut flowering judas,
To be eaten, to be divided, to be drunk
Among whsipers; by Mr. Silvero
With caressing hands, at Limoges
Who walked all night in the next room;
By Hakagawa, bowing among the Titians;
By Madame de Tornquist, in the dark room
Shifting the candles; Fräulein von Kulp
Who turned in the hall, one hand on the door. (ll. 21-29)

シルヴェロ氏 (Mr. Silvero) は、フランスの都市リモージュで陶器に心をとらわれる。日本人的な名前ハカガワ (Hakagawa) は、イタリアのベネチア派の音楽家ティチアーノ (Titian, 1477？－1576) の絵画に夢中になる。名前の一部にフランス語 (Madame de) が付いたマダム・ド・トルンキスト夫人 (Madame de Tornquist) は、心霊現象の会合を開いている。ドイツ人と思われるフォン・クルプ嬢 (Fräulein von Kulp) は、信仰から心を離れ、世俗の事柄に関心を寄せようとしている。4 人は、晩餐式のパンとぶどう酒に関心を示さない。彼らの振舞いは、イエス・キリスト、聖書、人間の言葉の密接な関係を考慮していない。

Michael Herbert は、これら 4 人を名前の分析から次のように指摘する (20)。シルヴェロ氏は、silver＝money を思い出させ、高価な陶器を崇拝する。ハカガワは、ハカ (墓) ＋ガ

ワ(側)を連想させ、故人の芸術家を崇める。マダム・ド・トルンキスト夫人は、torn、tattered、twisted に関連するものを連想させ、ある種の交霊会(恐らく黒衣のミサ)を開催している。フォン・クルプ嬢は、"Kulp" がラテン語で罪を意味する culpa を思い起こさせ、罪の共犯者か依頼人であろう。彼らの堕落ぶりは、ハーバートの名前の分析からも把握できる。

ゲロンチョンは、これら4人の個々の堕落ぶりを追想するばかりではなく、自分の青春時代の堕落ぶりも語っている。それは、人生の青春を象徴する5月の季節感に表れている。この季節の堕落のイメージは、F. O. Matthiessen が指摘するように(73)、アメリカの歴史家 Henry Adams (1838−1918) の *The Education of Henry Adams* 描写(ワシントンにおける春の魅力とその喪失)を参考にしていると判断できる。その描写の中に、ハナミズキ、クリ、ユダの木(キリストを裏切ったユダが首を吊った木を連想)が記述されている(Adams 268)。エリオットはアダムズの描写を聖餐式の冒涜に利用して、人間の堕落を展開している。

このように "Gerontion" の 21−29 行を検討した結果、ゲロンチョンを含めた5人の不信心な人物たちは現代版のパリサイ人と見なすことができる。過去の人々と現代の人々との堕落の類似性は、その堕落の歴史的な繰り返しを意味する。この類似性に注目すると、ゲロンチョンが語った "A dull head among windy spaces." (l. 16) が表す内容が浮かび上がってくる。"a dull head" は、人間がパリサイ人のように、イエス・キリストへの信心や自分の置かれている状況を理解していないことを暗示している。

ゲロンチョンは 29−30 行で、"Vacant shuttles / Weave the wind" と話す。この語りは、織物を織る梭(ひ)が空回りするイメージである。前述した 21−29 行の人間堕落の場面や、30 行の「風」が聖霊(たとえば、「使徒行伝」2章 1−4 節を参照)であることに注意を払うと、このイメージは人間の不信心の世界を示唆している。"Vacant shuttles / Weave the wind" は、不信心の世界に住む人間の堕落を暗示している。

ゲロンチョンの歴史的感覚は、過去と現代の密接な結びつきに根差している。この感覚は、"Gerontion" と同じ 1919 年に発表された "Tradition and the Individual Talent" に見られるエリオットの論考を踏まえている。その考えは、"the historical sense involves a perception, not only of the pastness of the past, but of its presence...." (49) である。このような彼の論考が "Gerontion" にどのように活用されているのかを視野に入れて、この詩の第三節に表現されている内容を探究する。

同節は、"After such knowledge, what forgiveness?" (l. 33) と発して、ゲロンチョンは、第二節で明らかになった人間の罪が赦される方法を模索し、歴史について次のように考える。

Think now
History has many cunning passages, contrived corridors
And issues, deceives with whispering ambitions,
Guides us by vanity. (ll. 33-36)

"passages"、"corridors"、"issues" に注目すると、「歴史」("History") から連想されるのは、彼が住む退廃的な家 (第一節) と聖餐式に関心のない不信心な 4 人の人物 (第二節) である。第一節と第二節の場面は、人間の罪が過去から現在へと繰り返されていることを表現していた。そこで、"deceives with whispering ambitions, / Guides us by vanity." が示唆するのは、ゲロンチョンがこの繰り返しを展開する人間の歴史全体を背景とした現代人を思っていることである。

では、ゲロンチョンが第三節の冒頭の問いに対してどのような答えを見出そうとしているのであろうか。その答えを理解するため、彼が次のようことを話す場面を見てみたい。

Think

Neither fear nor courage saves us.　Unnatural vices
Are fathered by our heroism.　Virtues
Are forced upon us by our impudent crimes. (ll. 43-46)

第一節での彼の戦争体験の背後に横たわっているものが示されている。"fear" や "courage" は戦争に伴う人間感情の表出である。この感情が兵士の心を満たすかどうかを、彼は疑問視している。彼の狐疑心の奥にあるのは、人間が神の恩寵を軽視して生じる "Unnatural vices" や "impudent crimes" を犯すほど利己的となっていることである。これらの罪の歴史的な反復の認識は、ゲロンチョンが発する "whispering ambitions" (l. 35) や "vanity" (l. 36) に表されていたと判断できよう。

ゲロンチョンは次のようなことも話している。

Gives too late

What's not believed in, or if still believed,
In memory only, reconsidered passion.　Gives too soon
Into weak hands, what's thought can be dispensed with
Till the refusal propagates a fear. (ll. 39-43)

The tiger springs in the new year.　Us he devours. (l. 48)

動詞が "Gives" なっている最初の引用文 (39－43 行) は、少なくとも三つの主語が省略されていると考えられる。それは、語り手ゲロンチョンの個人的人生の歴史、彼によって示される人間の歴史、人間の不信心に批判的なイエス・キリストである。複数の読み方が可能な理由は、三つの主語のイメージが神聖を汚す第二節の場面に暗示されていたからである。

最初の引用文に関する論考は、二番目の引用文 (48 行) の意味を把握する手がかりとなる。48 行の "The tiger springs in the new year." は、20 行の "Came Christ the tiger" を思い

起こさせる。イエス・キリストが直接に記述されていない 48 行の文章にある "the new year" という表現から、現在が詩の冒頭の冬季から春季に変わっていることを伝えている。語り手は、20 行の語句を頭に浮かべて、この変化を歴史的な視点で述べている。"Us he devours." は、この歴史的な視点による彼の発言の内容である。それは、堕落の社会が人間の歴史を通じて反復されていることである。

歴史的感覚を駆使するゲロンチョンは人間の堕落をどのように解決しようとするのであろうか。彼は、その解決方法を第四節の最後の 7 行で次のように試みている。

I would meet you upon this honestly.
I that was near your heart was removed therefrom
To lose beauty in terror, terror in inquisition.
I have lost my passion: why should I need to keep it
Since what is kept must be adulterated?
I have lost my sight, smell, hearing, taste and touch:
How should I use them for your closer contact? (ll. 54-60)

55 行は、2 人のイギリスの劇作家—Thomas Middleton（1580－1627）と William Rowley（1585?－1644?）—が合作した *The Changeling* 5 幕 3 場 150 行から "I am that of your blood was taken from you"（Middleton and Rowley 108）を下敷きにしている。エリオットの 1919 年の詩の 54 行には、下僕に刺されたビアトリス（Beatrice）が父親に向かって自らの罪（下僕に婚約者を殺害させたり、新しい夫から下僕へと心変わりをしたりしたこと）を悔い改める言葉が用いられている。エリオットは "Thomas Middleton"（1927）の中で *The Changeling* に触れて、ビアトリスが道徳的になるのは、下僕に刺された後である。彼女の道徳への目覚めは永遠に残るものである、とエリオットは発言している（162-63）。このような印象が 55 行の表現に認められよう。

54－60 行は、ゲロンチョンが "you" に語りかける場面である。エリオットは、ビアトリスの姿に見られるような情熱を、これらの詩行でも描いている。語り手は、彼女の場合のように、精神的再生に目覚めようとしているのである。

こうした自己認識に基づき、ゲロンチョンは人間の堕落を鋭く洞察し、自分自身や社会を歴史的な視点から見つめ、本来の人間性についての無知を悔い改めている。そこには、"your heart" からの遊離に気づく彼の姿が認められる。ゲロンチョンが語りかける二人称は、少なくともイエス・キリスト(Williamson 111）と彼の内面の自己が考えられる。彼は、人間の堕落がイエス・キリストを軽視しているためであるという認識を抱いているし、情緒や五感の働きが見られないことも自覚している。それは、彼が人間の堕落を自分の現在の姿を通して暗に伝えている一方で、自分自身の精神的な再生に目覚めようとする真摯な姿も暗に伝えている。

ゲロンチョンの二重のイメージは、第五節の次のような場面からも把握できよう。

Gull against the wind, in the windy straits
Of Bell Isle, or running on the Horn.
White feathers in the snow, the Gulf claims, (ll. 69-71)

ゲロンチョンは自分自身をかもめにたとえている。彼の行動には、二つの象徴的な意味が読み取れる。一つは、ゲロンチョンが聖霊を意味する風に逆らって進み、惨めな状態に陥っていることである。かもめがベルアイル海峡（カナダのラブラドル島とニューファランド島の間に位置する海峡）の強風に苦しみ、ホーン岬（チリの小島にある南米最南端の岬）に落下し、瀕死の危険にさらされることを想像するとき、われわれはその鳥の悲劇的な死を考えるであろう。今一つは、ゲロンチョンが現実の風に向かって進む人物で、逆境の中でも精神的再生の望みを決して諦めないことである。"White features in the snow" が暗示する清浄のイメージ、ホーン岬での生への執着を喚起させるメキシコ湾流（Gulf Stream）が、彼の勇敢な姿を連想させる。

ゲロンチョンに関する二重のイメージから察して、彼は人間の退廃の原因を歴史的過去（人間の不信心）にまでさかのぼり、醜悪な現在からの脱出の展望を見出そうとしている。

この詩は次のような表現で終わっている。

Tenants of the house,
Thoughts of a dry brain in a dry season. (ll. 74-75)

"Tenants" は、彼の脳裏にある人々（彼自身、彼が口に出す人物、われわれ読者）を指していると言える。彼がこれらの人々に、身も心も実は自分と同じように退廃的な状態に陥っていることを認識するように季節感で訴えている。

"a dry month" から示される冬におけるゲロンチョンの思いつきは、同じ季節が書かれた "Gerontion" の冒頭の２行（"Here I am, an old man in a dry month, / Being read to by a boy, waiting for rain."）を思い起させる。そのとき、この詩の構造が円環のイメージを印象づけている。この円環のイメージは、これまでのいろいろな場面が示したように、過去から現在にわたって罪深いことをする人間の現実をわれわれ読者に知らせている。ゲロンチョンの歴史的感覚は、過去と現在の密接な関係を土台として展開されていたのである。"Here I am" は語りかける対象—読者を含む様々な人々と彼らの社会—をゲロンチョンが意識した言葉である。この詩の冒頭から彼の二つの感情がうかがわれる。一つは、彼の倦怠な生活や、彼を取り巻く退廃的な人間社会が春にも続くと予期していることである。もう一つは、彼個人の精神的再生ばかりではなく、人間社会の再建も空しく願っていることである。

3. *Poems* (1920) における他の二つの詩の特徴：男女間の情欲

"Gerontion" の語り手ゲロンチョンの言動は、現在と過去の密接な関係を考慮したエリオットの歴史的感覚によって描かれている。第三詩集に収められている他の二つの詩—"Burbank with a Baedeker: Blesistein with a Cigar" (1919) と "Sweeney Erect" (同) —がそうしたエリオットの歴史的感覚のもとでどのように表現されているのかを調べてみたい。

"Burbank with a Baedeker: Blesistein with a Cigar" は、冒頭の 4 行を次のように描いている。

Burbank crossed a little bridge
  Descending at a small hotel;
Princess Volupine arrived,
  They were together, and he fell. (ll. 1-4)

この詩の表題から判断して、観光客のバーバンク (Burbank) は、イタリアの都市ヴェネツィアの歴史や文化に興味があるらしく、旅行案内の『ベデカー』を片手に小さなホテルにやって来た。後から、娼婦のヴォルポーネ (Volupine) が到着した。4 行目の "They were together, and he fell." が示唆するように、2 人の恋が繰り広げられた。それは、情欲だけの不毛の恋である。

情欲だけしかない不毛の恋の実態とその背景が、次のような場面で明らかにされる。

A lustreless protrusive eye
  Stares from the protozoic slime
At a perspective of Canaletto.
  The smoky candle end of time

Declines. On the Rialto once.
  The rats are underneath the piles.
The Jew is underneath the lot.
  Money in furs. (ll. 17-24)

ヴォルポーネの客ブライシュタイン (Bleisten) は、シカゴ生まれのウイーン系のユダヤ人である。その姿態は原生動物のように示されている。彼はイタリアの画家カナレット (本名 Giovanni Antonio Canal, 1697－1768) の景観画を見つめる。その描写は、ろうそくの燃えかすの消失のイメージから、人間の歴史的過去から現在社会までの衰退の様相をわれわれに連想させる。そこには、ヨーロッパ文化の衰退が含まれる。ベニスの取引所リアルト (Rialto) は、かつてはヨーロッパの商業経済の象徴的な存在であったが、現在は積荷の下に鼠が横行

し、ブライシュタインが毛皮の取引で金儲けをするような場所となっている。その場所で、彼とヴォルポーネの肉欲だけの愛が見られるのである。言い換えれば、文明の衰退と道徳の腐敗が存在するだけとなっている。

"Sweeney Erect" は表題のスウィーニーを次のように紹介する。

Morning stirs the feet and hands
(Nausicaa and Polypheme).
Gesture of orang-outang
Rises from the sheets in steam. (ll. 9-12)

娼婦のドリス (Doris) と彼がそれぞれ、ナウシカア (Nausicaa) とポリフィーム (Polypheme) にたとえられる。しかも彼は、類人猿オランウタンのような人物である。ナウシカアはスケリア (Scheria) の王アルキノオス (Alcinous) の娘で、遭難したオデュッセウスに着物と食べ物を与えて助けている (『オデュッセイア』(上) 6 歌を参照)。ポリフィームは一つ目の巨人族キュクロプス (the Cyclops) の首領であるが、セウスとその仲間により目を潰され、彼らの脱出を許してしまう (同 9 歌を参照)。ドリスと客のスウィーニーとの関係は、オデュッセウスに献身的な女性と悪漢のポリフィームとの併置によって、人間社会における男女間の不毛な愛を暗に伝えている。

類人猿に擬せられたスウィーニーは体毛で覆われ、下の裂けたところが足で、切れ込んだところが目である (ll. 13－14 行)。彼は朝ベッドから起きて、桃色の首筋から尻までかみそりで剃るようにドリスに向かって言う。彼が脛を剃ってかみそりの切れ味を試すと、彼女は自分が殺されると勘違いしたためか、てんかんの発作を起こす。

その後、2 人の振舞いが次のように示されている。

Tests the razor on his leg
Waiting until the shriek subsides.
The epileptic on the bed
Curves backward, clutching at her sides. (ll. 29-32)

But Doris, towelled from the bath,
Enters padding on broad feet,
Bringing sal volatile
And a glass of brandy neat. (ll. 41-44)

スウィーニーは、ドリスの発作にお構いなく、剃刀の切れ味を試す。彼女は、自分の発作がそのうち治まり、何事もなかったかのように素知らぬ顔をして、気付け薬とブランデーを持

って来る。このような男女関係は、"Burbank with a Baedeker: Blesistein with a Cigar" の場合と同じように、情欲だけで結ばれている。

このように、"Burbank with a Baedeker: Blesistein with a Cigar"と"Sweeney Erect" は、人間の歴史的過去（ヨーロッパ文明の衰退やギリシャ神話）に言及して、現代の男女間の不毛の愛を描いている。

4. "Gerontion" の表現の *Poems* (1920) への影響：前者の詩の評価

第三詩集 *Poems*(1920) の前半に新たに収録されているのは順に、"Gerontion"、"Burbank with a Baedeker: Blesistein with a Cigar"、"Sweeney Erect" である。同詩集の冒頭の "Gerontion" は、初めと終わりの詩行が同じ冬の季節を描くという点で、円環のイメージの構造となっていた。この構造はわれわれに、人間が聖書にまでさかのぼる歴史的過去から現在まで罪深いことを繰り返す世界の醜い現実を知らせていた。そこでの主テーマは、歴史的過去から反復される 2 点（①罪深い人間、②人間社会の堕落）であることが読み取れる。"Burbank with a Baedeker: Blesistein with a Cigar" も "Sweeney Erect"も、男女間の不毛の愛を通して①を指摘している。

第三詩集の前半では、上述した三つの詩の後に続くのが、第二詩集に含まれていた三つの詩—"The Hyppopotamus"、"Mr. Eliot's Sunday Morning Service"、"Sweeney Among the Nighingales"—である。最初の詩は、世俗的な人物描写による男女間の不毛の愛を通して①を描いている。二番目の詩は、人間の信仰の無さを介して①と②を示している。三番目の詩は、最初の詩と同じく世俗的な人物を描写して、①と②を明らかにしている。"Gerontion" を除く五つの詩は、この冒頭の詩の主テーマ（①、②）のいずれかの様相を受け継いでいる。第三詩集の前半に描写される内容は、人間の歴史的過去と現在の密接な関連性を強調するものとなっている。

第三詩集の後半は、"The Love Song of J. Alfred Prufrock" (1910-11) を冒頭とする第一詩集 *Prufrock and Other Observations* (1917) の詩がそのまま記載されている。冒頭の詩の主テーマは、③男女間の実らぬ愛、④上品ぶった社交界、⑤倦怠な場末、に分類される。そこから、現在の退廃的な人間社会の姿が浮かび上がってくる。第一詩集の他の詩が③～⑤のいずれかの様相を伝えているので、第三詩集のわれわれ読者はこの人間社会の姿を再確認することができる。第三詩集の後半では、このような鑑賞方法が適用され、同じ詩集の前半における印象（人間の歴史的過去と現在との密接な関係）を拠り所として、歴史的過去から続く人間社会の堕落した現在がより明らかになるであろう。その現在の姿から人間の歴史的過去も再認識できるであろう。このようにして、"Gerontion" は、第三詩集に表現されている内容に影響を及ぼしている詩であると評価できよう。

おわりに

T. S. エリオットの第三詩集 *Poems* (1920) は、冒頭を飾る "Gerontion" の主テーマ（罪

深い人間、人間社会の堕落）を起点として、他の詩が主テーマのいずれかを表す内容である。第三詩集の前半は、歴史的過去から現代まで続く人間社会の醜悪な姿を描き出している。第三詩集の後半は、現代の退廃的な人間社会を提示して、同詩集の前半の現代の様相をより詳しく鑑賞できる役割を担っている。

"Gerontion" の主テーマは、われわれ読者がこのような第三詩集の内容を理解できるのに大きく影響を及ぼしている。本稿は、エリオットの詩集とそこに収められた詩について論考した。その点で、本稿の取り組みは、彼の詩集や詩を新たな視点で理解できる一助となるであろう。

注

1. この点については、拙稿「プルーフロックの描写が及ぼす T. S. エリオットの第一詩集への影響」『比較文化研究』128、2017 年を参照。
2. この点についての詳細は、拙稿「*Poems* (1919) における T. S. エリオットの比較の描写」を参照。
3. 括弧内の数字は *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* の頁である。
4. エリオットの詩からの引用はすべて *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* による。
5. この点については、エリオットの "[A review of] *Son of Woman: The Story of D. H. Lawrence*. By Middleton Murry" 771 を参照。
6. この点については、拙稿「T. S. エリオットの罪意識への T. E. ヒュームの影響」を参照。
7. この点についての詳細は、拙著『T. S. エリオットの詩の研究—円環のイメージから脱円環のイメージへ—』を参照。

引用文献

Adams, Henry. *The Education of Henry Adams*. Boston: Massachusetts Historical Society, 1918. New York: Modern Library, 1931.

Eliot, T. S. "[A review of] *Conscience and Christ: Six Lectures on Christian Ethics*. By Hastings Rashdall." *International Journal of Ethics* 27.1 (Oct. 1916): 111-12.

---. "The Method of Ezra Pound." *Athenæum* 4669 (Dec. 1919): 1065-66.

---. "London Letter." *Dial* 73.6 (Dec. 1922): 659-63.

---. "[A review of] *Son of Woman: The Story of D. H. Lawrence*. By Middleton Murry." *Criterion* 10.41 (July 1931): 768-74.

---. "Thomas Middleton." 1927. *Selected Essays*. 1932. London: Faber and Faber, 1951. 161-170.

---. "A Commentary." *Criterion* 13.52 (Apr. 1934): 451-52.

---. "Gerousia [Gerontion]." *Invention of the March Hare: Poems, 1909-1917.* Ed. Christopher Ricks. London: Faber and Faber, 1996. 349-51.

---. *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot.* London: Faber and Faber, 1969.

Gallup, Donald. *T. S. Eliot: A Bibliography.* London: Faber and Faber, 1969.

Herbert, Michael, ed. *York Notes on Selected Poems of T. S. Eliot.* Burnt Mill, Essex: Longman Group, 1982.

Jain, Manju. *T. S. Eliot and American Philosophy: The Harvard Years.* Cambridge: Cambridge UP, 1992.

Matthiessen, F. O. *The Achievement of T. S. Eliot: An Essay on the Nature of Poetry.* 1965. New York: Oxford UP, 1969.

Middleton, Thomas and William Rowley. *The Changeling.* 1958. Ed. N. W. Bawcutt. London: Metheun, 1961.

Southam, B. S. *A Student's Guide to Selected Poems of T. S. Eliot.* 1968. London: Faber and Faber, 1994.

The Bible, Containing the Old and New Testaments. 1970. Old Testament, 1952. New Testament, 1946. New York: American Bible Society, 1973.

オウイデイウス. 『転身物語』. 1966. 田中秀央・前田敬作訳. 京都:人文書院, 1975.

古賀元章. 「T. S. エリオットの罪意識への T. E. ヒュームの影響」『水産大学校研究報告』49.3 (2001): 123-29.

---. 『T. S. エリオットの詩の研究—円環のイメージから脱円環のイメージへ—』. 北九州: 大学出版, 2004.

---. 「*Poems* (1919) における T. S. エリオットの比較の描写」『福岡教育大学紀要』61 号 1 分冊 (2012): 29-37.

---. 「プルーフロックの描写が及ぼす T. S. エリオットの第一詩集への影響」『比較文化研究』128 (2017): 79-88.

ダンテ・アリギエル. 『神曲』(カラー版世界文学全集第 2 巻). 平川祐弘訳. 1968. 東京 河出書房新社, 1973. 全 50 巻, 別巻 2 巻. 1966-70.

T. S. エリオット. 『荒地』. 岩崎宗治訳. 東京: 岩波書店, 2010.

ホメロス. 『オデュッセイア』(上). 松平千秋. 1994. 東京 : 岩波書店, 2006. 全 2 冊 (上・下). 1994.

『聖書』. 新訳聖書. 1950. 旧約聖書. 1955. 日本聖書協会改訳. 東京: 日本聖書協会, 1969.